
Sister Panic！！

春夏秋冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sister Panic!!

【Nコード】

N9706Y

【作者名】

春夏秋冬

【あらすじ】

俺、瀬川和樹は二人の妹と三人で平々凡々に暮らしていた。そこに海外で働く母から突然の電話。「近いうちに妹が三人そっちに行くから。」おっと全く話が見えないぞ？そうかこれは夢だな。夢の中での電話だったんだな。起きたらいつもどおりだ！オヤスミ！！起きたら妹が五人いました。なんか俺嫌われてるし！なんだこれ！？これからどうなるんだ！？

日常系コメディー中心です。

ブローグ

ブルブルブルルルル。

「はい、こちら瀬川ですけど。」

「お兄ちゃんのパンツは今何色かな？きやは」

ガチャ。

さーて、寝るかなあ。

ブルブルブルルルル。

「もしもし？」

「もーつれないわねえ。その声は和樹ね。いつからそんなに冷たくなっちゃったの？お母さんさみしくて泣いちゃいそう…。」

「では何か？今日は純白のブリーフだよ！お母さんは！？とでも答えろと？俺は変態か！」

「心配しなくてもあなたは立派な変態よ。そこだけはお母さん譲れないわ。ちなみにパンツは穿いてないわ。」

「譲れ！！そこは俺の名誉のためにも全力で譲ってくれ！！そしてパンツを穿け！！」

「そんなことより、そっちはどう？ちゃんとやってる？」

「そんなことで片付けていい問題なのかは甚だ疑問だが、まあ問題なくやってるよ。」

「成績も？」

「失礼。訂正させてもらおう。成績以外は問題なくやってます。」

「その点は今度帰ったときにじっくり聞くとして、千夏達は元気？」
しまった。自ら地雷を踏んでしまった。

「お手柔らかにお願いします。あゝ千夏も愛菜も相変わらずだよ。
ちゃんと元気にやってる。掃除、洗濯その他もろもろもしっかり分
担してやってるよ。」

「さすが和樹ね。お母さんの聞きたいこと全部理解してるなんて。
感動で服を脱いじゃいそう。」

「俺は母さんが全く理解できないよ。で？本題は何？何か言いたい
ことがあったんでしょ？」

「あら気付いてたの？驚いてお母さんブラが取れたわ。やるわね和
樹。」

「なんだ！？それどんな状況だ！？俺にはさっぱり理解できない！

「！」

「冗談よ。じゃあ本題に入るわね。ちょっと聞いてる？」

「母さんの冗談は冗談に聞こえない…。で、何？」

「近いうちに妹が三人そっちに行くわ。」

おっと、急に話が見えなくなったぞ？

「ごめん、母さん。もう一度言ってくれる？」

「もう！あんたはついに日本語まで聞き取れなくなってしまったの？あなたの国語のテストの点が心配だわ。さては一桁ね。」

「うるさいな！ギリギリ二桁はあったよ！で、なんて!？」

「ギリギリ!？今、アンタギリギリって言った!？」

え〜い！やかましいやつだ！

「そんなことは今は問題じゃないだろ！妹が三人ってどういふこと

だよ！俺には妹は二人しかいないはずだし、その二人は今自分の部屋で寝てるはずだ！なんだ！？分裂したのか！？スモール○ールのように！？」

「保護者としては大問題なんだけどね…。まあいいわ。とりあえず、新しい妹が三人そっちに向かってるから、詳しくはその子達に聞いて。ちゃんと優しくしてあげなさいよ。これから家族になるんだから。じゃ。」

ガチャ。

「えっ！？ちよつと！？母さん？母さん！？」

ツーツー。

「切れた…。」

『妹が三人そっちに向かつてるから。』か……。

「全くもって意味不明だ…。」

そのつぶやきは誰に聞こえることもなく、漆黒の闇に吸い込まれるように消えていった。

第一話 出会い

シリシリシリシリシリシリ。

ベシー！

「ん．．．朝か．．．。」

うーん、なんか変な夢を見たような気がするなあ。妹が三人増えるとか何の冗談だよ。ただでさえ二人で大変なのに三人も増えたらこの家は崩壊しちゃうぞ。

そんなことを思いながら階段を下り、リビングに出る。

「あれ？風呂場の電気が点いてる？」

昨日消し忘れたか？まあいいや。

ガチャ。

「えっ？」

目の前に全く知らないタオル一枚の少女が現れた。さてどうする？

1、謝る。

2、見なかったことにする。

3、ごまかす。

4、逃げる。

↑ピッ。

「失礼、間違えました。」

ガチャ。

「きやあああああああああああああああ！！！」

「うわあああああああああああああ！！！」

ち、小さい肉まんが！！肉まんが二つ！！ええい！離れる俺の煩惱！なんだ？どういうことだ！？あれは一体誰なんだ！？

「何事だ！？兄ちゃん！！！」

「どうしたの！？お兄ちゃん！！！」

「佳奈！何があったの！？」

「……………」

更に二人増えました。

やそれはない。そもそも父さんは愛菜が産まれる前に死んだからなあ。

「すいません、面白い顔しているとこ申し訳ないんですが．．。」

「してない！面白い顔なんてした覚えは一ミリたりとも存在しない！！」

「す、すいません。あまりにお顔の調子がよろしくなさそうだったので、つい．．。」

遠まわしにすごく馬鹿にされてる気がするのには気のせいだろうか．．。

「おい！兄ちゃんは面白い顔なんてしてねーぞ！」

おっ！千夏！兄ちゃんを庇ってくれるか！なんて心の優しい子なんだ。兄ちゃん感動で涙が出そうだよ．．。

「兄ちゃんの顔はいつもブサイクだ！！」

「お、お兄ちゃん！？すごい勢いで目から水が溢れ出てきてるけど

大丈夫!？」

ほっといてくれ!!俺はどうせブサイクだ!!

「すみません……。私が変なことを言っただけに……。」

「ああ……」本当のことだから、気にすんなよ。」「

ボカツ!!

「いってー!!何すんだよ兄ちゃん!!」

「お前はもうしゃべるな!」

話が進まん!!そんなことよりも……。

「一体どういことなんだ?いきなり妹になりましたって言われても、こっちは何がなんだか……。」

「瑠璃さん……お母様から何か聞いていませんか?」

母さん？母さんが何かって・・・ま！まさか！！

「も、もしかして、妹が三人向かってるっていうあのコトか！..」

「よかった。ちゃんと伝わっていたんですね。」

「あ、ああ。」

あ、あれは夢じゃなかったのか。寝ぼけててつい夢の話だとばかり
..。

「兄ちゃん、妹ってどういうことだ？」

となりの千夏が聞いてくる。ん？なんだ？ちょっと怒ってる？

「お兄ちゃん・・・。どういうこと？」

「おわあ！？」

愛菜が切れてる！顔は笑ってるけど、心が全く笑ってない！！超怖

「明らかに初めの25分はいらなかったよね？王国がどうか．．．」

「な、何言っただよ、ぐすつ．．．なんて悲しい話なんだ．．．ひつく。こんな悲しい話で泣かないなんて兄ちゃん人間じゃない！！」

ひどい言われようだ。

「とりあえず、経緯は理解しました。まあこっちとしては、驚いただけで別に追いつ返そうとしてたわけではないし、母さんが決めたなら文句はないよ。な？千夏、愛菜？」

「おう！」

「うん！」

「ありがとうございます！それじゃあとこれからよろしく願いしますね。ほら、優希も佳奈もあいさつして。」

「．．．．．ん。」

優希と呼ばれた子が顔を上げて俺の方にトコトコ歩いてくる。な、なんだ！？

「・・・・・・・・優しい匂いがする。・・・・・・・・お日様の匂い。・・・・・・・・すう」

そういつて俺の膝の上に乗って寝てしまった。

お日様の匂い？ちゃんと洗濯したはずだけだな・・。

「ふふつ。優希ったらもう和樹さんのこと好きになっちゃったみたいね。」

「はぁ・・・・・・・・・・。」

よく分からないことを言われたがとりあえず悪感情ではなさそうなので良しとしとこう。

「むう・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

両隣から発せられる凶悪なオーラについては気付かなかったことにしておこう。ってかなんで怒ってたんだ？

パンツ!!

「ちょっとアンタ!!」

いきなり、立ち上がって俺を睨みつけるミニ肉まん。もとい佳奈。

「聞いてんの!? アンタよ! アンタ! 無視するんじゃないわよ!」

なにやらずいぶん虫の居所が悪い様子。ここは一つ落ち着いて対処しよう。

「まあ落ち着け。我が妹よ。」

「だ・れ・が・妹じゃー!!!」

「うわぁ!!」

フォ、フォークが飛んできた!! 俺の眉間めがけて!! こ、こいつ! 出会ったその日に兄貴を冥土に送るつもりか! 危険すぎる!

「な、何するんだ!? いきなり危ないだろ!!」

「うるさい！あんた私に何か一言ないわけ！？人の、そ、その！・・は、裸見といて！何か言うことはないわけ！？」

どうやらこの娘っ子は、裸を見られたことを気にしているようだ。といっても実際はタオルで見えてないんだけどな・・・。

まあでもこのお年頃の女の子はこういうことに敏感だからな。ここは一つ大人の余裕というやつを見せてやろう。

「いいか？よく聞け。佳奈よ。」

「な、何よ！？」

「女の魅力は胸じゃない・・・・・・・・・・うなじだ！！」

ボゴォ！！

「ぐっはあ！！」

「ねえ。お姉ちゃん、この人殴っていい？」

「落ち着いて、佳奈。あなたはすでに殴っているわ。」

「くっ！マニアックすぎたか！」

「お兄ちゃん、そういう問題じゃないよ・・・。」

ああ・・・これから俺はやっていけるのだろうか・・・。

第二話 佳奈の想い

「私にあんたを兄貴なんて認めないわ!!」

「ぬう、この俺のどこが不服だと申すか!!」

「全てよ!!」

ぬぬう。手厳しいなあ。。。仕方ない。

「わかった。俺が悪かった。素直に謝るよ。裸を見せてくれてありがとうございました。」

ボゴォ!!

「あんた。。。謝る気。。。ある?」

「すいませんっしたあ!!自分チヨーしこいてました!!マジすんませんっしたあ!!」

やべー!こいつ素手で壁に穴を開けやがった!シャレにならん!

「大体、お姉ちゃんと優希はいいの!?こんなブサイクで馬鹿で変

態な男が兄貴でも!？」

なんつー言われようだ。まあ事故とはいえ、裸を見られかけたら誰だって怒るわな。ちよっと反省。

「私は大歓迎よ。和樹さんは優しいですし。面白い方ですから。．．．．．主に顔が。」

「顔っ!？」

俺そんなにブサイクだったんだろうか。ショックだ．．。

「．．．．．お兄いい匂いがする。．．．．．私は好き。」

ふおお。この無表情な顔の子の上目づかいは反則級の可愛さだ。おもわず頭を撫でてあげたくなる。

「．．．．．んっ。」

気持ちよさそうだ。おもわず顔が綻ぶ。

「ゆ、優希が食べられちゃう!!」

「食べねえよ!! ！! という状況だそれは!？」

本っ当に失礼なやつだなこいつは・・・。

「とにかくっ！お姉ちゃん達が認めても私は認めないっっ！どうせっ！またどうせすぐに私達なんか煩わしくなって追い出すに決まってるわ！こんな家族のこととかもどうしてもよさそうにしか思っていない男なんか私は信じない!!」

バンツ!!!

「大人しく聞いてれば好き勝手言ってくれるじゃねーか。オイ。」

びつくりした。。。ずっと黙ったままだった千夏が急に立ち上がった。っていうか、ヤバイ!!こいつ久しぶりにマジ切れしてやがる!

「あー、佳奈とか言っただけ。お前。」

「だっただら何よ!」

「お前も兄ちゃんの妹、私達の家族になるんだから教えといてやるよ。」

何を言うつもりだ・・・？千夏？

「確かに、兄ちゃんはブサイクで馬鹿で妹のパンツをさも自分のもののように穿く変態の中の変態だ。」

「待った！ストップ！捏造されてる！兄ちゃんそんなことした覚えはないんだけど！？」

「兄ちゃんは少し黙ってて！」

なんだ？どうなった？なんで俺が怒られてんだ？全く理解できないぞ??

「その変態がなんなのよ!!」

「お前は兄つてのがどういう意味を持って産まれてくるのか知ってるか？ただ単に早く産まれたって意味じゃねえんだよ。」

「だから何よ!!」

「どんなに早く産まれてもどんなにカツコよくて、スポーツができて頭が良くて、次に産まれてくる弟や妹を守ろうともしないやつは兄なんかじゃねえし、きっと兄なんて呼ばれねえよ。」

千夏・・・。

「でもなあ！普段どんなに適当でも、どんなにダサくても、変態で頭が悪くても!・・・いざというときには絶対に助けに来てくれる！守ってくれる！そんな人だからこそ兄って呼んでんだよ！妹や弟にとって唯一のヒーローなんだよ!!」

「だったら!!だったら何なの!!」

「まだ分かんねえのか!!お前は兄ちゃんを・・・!!家族のことをどうでもいいと思っている男と馬鹿にした!私や愛菜が誰よりも尊敬してる兄ちゃんを馬鹿にしたんだ!兄ちゃんはなあ!父さんが死んでから今までずっと私や愛菜の面倒を見てくれてんだ!守ってくれてんだ!母さんが仕事で忙しい分、私達に愛情をくれてんだよ!誰よりも家族のことを想ってくれてんだ!そんな兄ちゃんを馬鹿にすんじゃないよ!!」

「ッ！私だつて！！私だつて・・・！！」

バツ！タツタツタツタ・・・バンッ。

「あ！佳奈！！」

「あつ！おい！！」

あー。外に出て行っちゃった・・・。

それよりも、あいつ泣いてた気がするけど・・・気のせいかな？

~~~~~

佳奈が外に出て行ってから一時間が経過した。

「千夏、あんまり気にすんなよ？元はと言えば俺が完全に悪いわけだし、お前の言ってくれたことは兄ちゃんメチャクチャ嬉しかったからな。」

「うん．．．でも自分でもびっくりしてんだ。兄ちゃんが変態とかブサイクとか言われてるときは全く気にならなかったのに．．．」

「いや、そこは気にしろ！めっちゃ気にしてくれー！」

妹達の中での俺のイメージは一体どうなってしまっているんだろうか．．．。

「和樹さん、ちょっといいですか？」

「あつ。うん、すぐ行くよ。」

なんだ？雅のやつ、やけに深刻そうな顔してたなあ？

まっ！まさか！佳奈を苛めた罰として何かされてしまうのか、俺はいいやいや苛めてないけど、いやでももしかしたら．．．。

「あの、和樹さん？」

「ひゃああい！？今行きましたゅー！！」

ちびりそうだ・・・。

「あの、私が言いたいこと分かりますよね？」

「ああ。」

仕方ない。俺も男だ。覚悟を決めよう。せめて男らしく『ドンと来い!!』と言ってビンタでもなんでも甘んじて受けよう!!

「和樹さん!!」

「や、優しくお願いしますう!!」

「ごめんなさい!!」

.....  
.....へ？

「あ、あの、優しくしてくれとは一体？」

「気のせいだ。忘れてくれ。」

どうやら制裁ではなかったようだ。助かった。

「あれ？でもなんで雅が謝るんだ？」

「佳奈のこと怒ってますよね？」

ああ。そういうことか。

「いや、全然。っていうか元はと言えば俺の責任だからな。」

「そうですか……。よかった。」

「それにしても、佳奈っていつもあんななのか？」

「あんなとは？」

「うーん、なんていうか、ピリピリしてるというか気を張ってるというか……。」

もちろん新しい環境になれていないってのもあるんだろうけど、それ以外の理由があるような気がするんだよね…………。

「気付いてたんですね…………。」

「ってことはやっぱり。」

「はい、あの子のアレにはちょっとした理由があるんですよ。」

「理由？」

「私達が祖父の家で暮らしていたことはお話しましたよね？」

「ああ。」

両親を早くに亡くした彼女らは早くから祖父の家で暮らしていたらしい。

「実は、祖父と私達はあまり良い関係ではなかったんです。」

ああ。だからか．．．。

「寂しかったんでしょうね。あの子は。甘えられる相手が見つからなかったんでしょう。私はあの子に甘えてもらえなかった．．．。そんなに頼りなく見えていたんですかね。私は、姉失格です．．．。」

そういつて雅は顔を伏せた。泣いているのだろうか．．．。

「大丈夫だ！！これからは俺が五人まとめて守ってやる！！だからお前も、もう気負わなくていい．．．。」

自然と体が動いていた。自然と口から言葉が出ていた。なぜかは自分でも分からなかったが．．．。

「和樹さん．．．。」

「違うだろ？」

「えっ??？」

雅がきよとした顔をする。

「兄さん、だろ??」

「……はい！兄さん!!」

この家に来て、雅は初めて笑った。その顔はいつものような大人びたものではなく、年相応の無邪気な少女の顔だった。

外では雨が降り出していた。

~~~~~

「もー……最悪だ。私。」

勢いで飛び出してしまい、かといって知らない町で遠くまでいけるはずもなく、がむしゃらに走っていたら、足をひねってしまって痛くて歩けない……。

「拳句の果てには、雨までふってきちゃったし。」

痛む足を引きずって公園の屋根つきの遊具の下にもぐりこむ。

「私なんであんなこと言っちゃったんだろう。」

裸を見られたことは確かに恥ずかしかったけど、よく考えればあれは事故であって、落ち度は両方の不注意にあったことは明らかだ。じゃあなんで……。

「やっぱり、羨ましかったのかなあ…………。」

そう。あの三人を見ていて初めに思ったことがある。それは『信頼』

普通に話してるだけでも伝わってくる。お互いを信頼して、理解している優しい気持ち。

私がずっと欲しかったもの。

お姉ちゃんと優希のことはもちろん大好きだけど、お姉ちゃんはずっと大変そうだった。私達のために自分を捨てて私達の面倒を見続けてくれている。そんなお姉ちゃんにこれ以上負担はかけられない。

「怒ってるよね、絶対…………。」

あの千夏という人が怒るのも当然だ。私だってお姉ちゃんのことをあんなふうに言われたら怒っているだろう。あの人のいう通り、和樹という人もちよつと変わっているけど、とても優しい人だというのは伝わってきた。

その証拠に優希が自らあの人のもとに近づいていったじゃないか。あれには凄く驚いた。優希は滅多に男の人と話さないのに、自分から行くなんて初めて見た。相当優しい匂いがしたのかもしれない。（匂いとかは私にはわからないけど。）

「どうしてこうなっちゃたんだろ．．．．。」

本当はとっても楽しみにしていたんだ。瑠璃さんはとっても優しくったし、その人の子供なんだからきつと私達を受け入れてくれるって思ってた。実際、受け入れてくれたし、すつごく嬉しかったのに、くだらない羞恥心で全部台無しにしてしまった。

自分で自分に腹が立つ。と同時にもうあそこには戻れないという不安感と孤独感が襲ってくる。

あんなに暖かった場所なのに．．．．。やっと見つけた私達の居場所だったのに．．．．。

「寂しいよ．．．．．」

頬を伝う涙が一粒また一粒と流れていこうとしたその時．．．．．

「こんなところにいたのか．．．．．」

頭上から声がかけられた。

「う、うそ？な、なんで？」

「服も濡れてるな．．．．．。そんな状態じゃ風邪引くぞ。ほら帰ろう。」

なんで来てくれたの。あれだけひどいこと言ったのに．．．．．。
あつ！早くお礼を言わないと！

「な、何しに来たのよ！！私のことなんてほっといてよ！」

また言ってしまった！迎えに来てくれて嬉しかったのに！自分の気持を素直に出せない．．．．．。どうしよう。怒っちゃったよね。帰っちゃったらどうしよう．．．．．。

不安が心の中で渦を巻く。でもその彼は……………。

「ごめんな。朝のことは本当に俺の不注意だった。せっかく新しい家族との第一歩だったのに台無しにしてしまった。」

そんな言葉と共にタオルを頭にのせてくる。

「……………どうしてそんなに優しくしてくれるの？……………あんなにひどいこと言ったのに。」

私にはわからない。ここまでしてくれる理由も、意味も。

「理由なんてないよ。」

「えっ？」

「俺達、兄妹にはさ、父さんがいないんだ。俺が七歳で千夏が五歳、愛菜がまだ母さんのお腹の中にいるときに、交通事故で死んだんだ。」

その話は瑠璃さんからも聞いていた。

「正直、俺はその時のことをあんまり覚えてないんだけど、母さんは、俺は一度も泣かなかった、強い子だったって言ってた。でも俺は思っんだ。多分俺はその時、泣かなかったんじゃないかって、泣けなかつたんじゃないかって。」

淡々と話す彼の目は遠いどこかを見ているようで……

「隣では千夏が毎日泣いていて、それをなだめるので精一杯だったし、母さんは愛菜のことがあつて手一杯だったからかな。幼心に思っただんだと思う。俺が家族を守らないとって。」

とても優しいものだった……。

「今思えば、ガキが何言っただって感じだけどね。その後はやっぱり大変だった。料理は作れないわ、母さんは仕事でいないわ、愛菜は泣き出すわ、千夏は勝手にどっかいくわ、毎日がてんやわんやだった。自分の時間なんてほとんど無かったよ。」

「それでも……、それでも、妹達が元気で暮らせるなら、それでいいって思っただんだ。」

羨ましい…………。

「だから、俺はたとえ何を言われようと、妹がいなくなったら捜しにいくし、助けを求められたら、必ず助けに行く。それが家族つてもんだろ？」

この人達の絆が本当に羨ましい。

「私にも…………。」

「ん？」

「私にも、いつかそんな家族ができるかな!？」

「何言ってるんだよ。」

「…………。」

「もうとっくに手に入れてんだろ？お前は俺の妹なんだから。」

「うえ．．．．．ひつく．．．．．うわああああああん！」

我慢していたものが溢れるように涙となって頬を流れていく。

私は彼の胸でまるで赤子のように泣いた。彼はそんな私を守るようにいつまでも優しく抱きしめてくれていた。

~~~~~

佳奈をおんぶして傘を差して帰るのには、流石に苦労した。少し運動しないとだめかな．．．．．。

「ちょっと！早く歩きなさいよ！濡れるじゃない！」

こいつ．．．．．落としちゃってもいいかなあ。

「早く行かないと、殴るわよ．．．．．。」

「ひいひいひい！」

なんつー暴力的な妹だ！なんでもかんでも暴力で解決するのは兄ちゃんいけないと思います！

「・・・・・・・・殴るわよ？」

「暴力万歳！！」

何を言っているんだ俺は・・・・・・・・。

そうこうしてるうちに家についた。

「ほら、入れよ。」

「う、うん。」

「大丈夫だよ。みんな家族だからな。」

「うん・・・・・・・・。。。」

ガチャ。

「あっ！お兄ちゃん達帰ってきた！！」

そう言って全員集まってくる。

「佳奈！よかった．．．．．心配したんだよ？」

「．．．．．佳奈がいないと私、寂しい。」

「うん．．．．．ごめんね。」

「お兄ちゃん、佳奈お姉ちゃん！お帰りなさい！」

「うん．．．．．愛菜、心配させてごめんね。」

各々が佳奈を迎え入れる。さて、あとは一人だけだな．．．．．。

「千夏、そこにいるの、バレバレだぞ。」

「うう。兄ちゃん、お帰り。」

「それだけか？」

そう言うと、千夏は真っ直ぐに佳奈のほうを向く。ちょっと顔が怖いぞ、千夏。

「あの……その……ひどいと言ってごめんなさい。」

「……………」

「……………」

「あー！もう！じれったいなあ！なんだそのへなへなした態度は！！もっとシャキつとしろ！！帰ってきたんなら堂々とただいまって言え！お前は私の妹だろうが！！」

「……………」

「やれやれ……………」

いろいろあったが、こうして、新しい家族を迎えた瀬川家の新しい生活はスタートした。

## 第二話 佳奈の想い（後書き）

作者に何が起ったのか、異常に長くなってしまいました。しかも後半はやたらシリアスな雰囲気になってしまいました。コメディーを期待してた人ごめんなさい。でもこの話は、和樹たちと佳奈たちが歩み寄る大事な場面だと思ったので書きました。ここからはコメディー全開になっていくと思うので、ここで読むのを止めるなんて言わないで下さい。作者が泣きます。よければ感想等よろしく願います。ではまた次回会いましょう。

### 第三話 家族会議

雅達が俺達の家族になって一週間が経過しようとしていた。

ここで俺達、瀬川家の兄妹の構成を再確認しておきたいと思う。

俺・和樹（高2） ↓ 雅（高1） ↓ 千夏（中3） ↓ 佳奈、優希（中2）  
↓ 愛菜（小5） （佳奈と優希は同学年だが、佳奈は4月生まれで、  
優希が3月生まれなので、実質的には佳奈が姉。）

「うーん、大所帯になったもんだ・・・。」

「兄さん、ちょっといいですか？」

「どうした雅？今日も可愛い顔してどうしたんだ？」

「ありがとうございます。兄さんも今日はちゃんと目と鼻と口がついていてかっこいいですよ。」

「今日は！？えっ！？何！？どういうこと！？」

たまについてないことがあるの!?

「そんなことはいいんです、それより家のことについてなんですが・  
・。」

「よくない!よくないぞ!?それは俺にとっては何よりも優先するべき最重要事項だ!」

「いいじゃないですか。今日はついているんですから、何も問題はありません。」

「ついてない日があることが大問題だ!!その日は俺の顔つるつるなんだろ!?気持ち悪すぎるだろ!」

目と鼻と口がついてない日ってどんな日だ・・。今度・・病院行こう・・。

「いいじゃないですか。兄さんの顔は目と鼻と口がついててもちゃんと気持ち悪いですよ?」

「うわああああん!」



「そうだ。一体どうしたんだ？いきなり全員集めたりして。」

「はい、そろそろ家族会議をする必要があると思ったんです。」

「家族会議？」

「そうです。引越しの後片付けも落ち着きましたし、佳奈と優希も新しい生活にある程度なじんできたので、ここらへんでこれからの生活について話をするべきなのではないか、と思ったんです。それに一度こうやって、全員でお話する機会も欲しかったですし。」

「……………自分のお部屋があるの、うれしい。」

優希が嬉しそうにささやく。

「そうだな。そろそろ決めないといけないこともあるしな。」

「はい。」

「じゃあ始めるか！家族会議！！」



「うばあー!!」

千夏からはエルボーをもらい、愛菜からはつねられ、佳奈からは手元にあつたペンを投げられた。ものすごく痛い。

「な、何すんだよ．．．!!」

「ケツ!」

「お兄ちゃんのバカ!」

「フン!」

なんだ?こいつら、急に機嫌が悪くなりやがった。反抗期か?．．．  
．．．とそつえば優希からは何もされなかったな．．．．．。

「やっぱり優希は優し．．．．．。」

ジッ。

なんだかものすごく見られていた．．．．．。睨まれているわけではないが、なんだろ?すごく怒っている気がする．．．．．。

「あ、あの．．．．．優希さん？」

「．．．．．」

む、無言の圧力！！冷や汗が止まらない！

「う、ごめんなさい！」

「．．．．．ん。」

それだけを言っただけで視線を前に戻す優希。超怖かった．．．．．。

「まったく、雅お姉ちゃん、こんな馬鹿兄貴に付き合ってたら日が暮れちゃうわ。話を進めて。」

「その通りね。じゃあまず家事全般からいきましょう。」

「なぜ俺が悪者に．．．！腑に落ちん！」

もうワケがわからない。

「じゃあ、家事全般はどうでしょうか？何か意見はありますか？」

「普通にサイクルでいいんじゃないか？」

「それだと少し不安ですね。佳奈は料理ができないですし、優希は背が低いので洗濯物を干したりするのは少しつらいかと……。」

「なるほど。」

「っていうか佳奈、料理できないのか。見た目通りだな。」

ヒュッ。

「兄貴、なんか失礼なこと考えてない？」

「な、何も考えてないぞ！」

「こいつ心を読みやがった！お前はサトリか！」

「なあ、雅姉ちゃん、得意分野で分けたらいいんじゃないのか？」

「千夏がそんなまともな案を行ってくれるなんてお姉ちゃん思ってもみなかったわ。得意かどうか自分で言うのは信憑性にかけるので、推薦方式で一度決めてみましょうか。」

「へへ．．．！それほどでもねえよ。」

おい、馬鹿にされてんぞ、気付け千夏。っていうか雅は根はドSなんだな．．．．．。気をつけよう。

「それじゃあ、まず洗濯は誰がいいと思いますか？」

「兄ちゃんが洗って干してくれる服はいつもいい匂いがして気持ちいいぜ！」

「おっ？そうか？そう言ってくれと兄ちゃんうれしいぞ！」

「では、『洗濯・兄』と。」

雅が紙に書き入れていく。

「次は料理ね。」

「……………お兄の作ってくれる料理……………  
すごくおいしい。」

優希がうれしいことを行ってくれる。

「そうか。そう言ってくれると兄ちゃんも作る甲斐があるってものだ。」

「それじゃ『料理・兄』と。」

「次は掃除ね。自分の部屋は自分ですとして、他の場所ね。」

「悔しいけれど、兄貴の掃除スキルは本当に凄いと思うわ。兄貴が掃除した後にはチリ一つ残ってないもん。」

おお、まさか佳奈から褒められるとは……………。

「ありがとうな。佳奈。」

「べ、別に本当のことを言っただけよ！」

うむ、よいツンデレだ。

「じゃ、『掃除・兄』と。」

「次は買い物かしら。この中に買い物上手はいるかしら。」

「買い物ならお兄ちゃんが一番だよ！だって9980円の蟹を500円まで安くしてもらったことあるもん！」

「ふふん、俺に値切れぬものなど無いわ！」

その店、出禁になったけどな。

「『買い物・兄』と。」

- - - - -

「決まったわ！」

そういつて雅が紙を見せてくる。そこにはこんな風に書いてあった。

家事・兄

補欠・妹×5

「なあ．．．。この図は何かがおかしいと思わないか？」

「「「「完璧。「「「「

「どこがだ！？お前らの目は節穴か！？家事の分担作業を決めるのに『家事・兄』ってなんだ！？俺には分担されているようには全く見えないんだが！？」

「ま、まさか！？兄さん、何か不満があるんですか！？」

「まさかどころか不満しかねーよ！！それに補欠ってなんだ！？家事の補欠なんて聞いたことねーぞ！？」

「何を言ってるんですか？兄さんは補欠の重要性を全く理解していないようですね．．．。」

「兄ちゃん、頭わりーなあ。」

「無能ね。」

「……………残念。」

「ひつく…………ふえ…………。」

な、なんだ！？意味不明すぎて混乱してきたぞ…………？ここは雅の話をよく聞いてみる必要があるそうだ。

「いいですか？この補欠というものは、いついかなるときでも兄さんの代わりを務められる、いわば親衛隊みたいなものです。」

「ふむ…………。」

親衛隊…………。なんか補欠が必要な気がしてきたのは気のせいかな？

「例えば、兄さんが病氣や怪我をしたときは私達補欠の出番です！腕の見せ所です！」

おお…………。なんかすごく分かりやすい説明だ。こんなに筋が通っ

ている会話は久しぶりだ。なんだか続きに期待ができそうだ・・・！

「だから『家事・兄』となります。」

おっとっと、全く分からなくなったぞ？どうしてこうなった？

「えっ？結局のところ、普段の家事は俺ってことだよな？」

「そうなります。」

「なってたまるか！！今の会話に費やした時間を返せ！」

こうして延々と議論を交わした結果、サイクルになりました。

だから、最初に言ったじゃん・・・・・・。

#### 第四話 嵐の前の夕食

グツグツ．．．．．トントン．．．．．。

「あっ！違う！佳奈、それは後で使うからまだ入れないでいい！」

「えっ？そうなの？」

「それよりも、そっちの皮を全部剥いてくれ。」

「分かったわ。」

家事やその他もろもろの事がある程度決まった日から、数日経った。

そして今俺は、夕食の準備を佳奈の手伝いという形で行っていた。つていうかほとんど俺がやってただけだね。

「ねえ兄貴。」

「なんだ？」

「これ剥いても剥いても皮が出てくるんだけど、どういこと？」

「は？何言つてんだお前？」

剥いても剥いても皮が出てくる？なんだそれ？自己再生か？

「ほら、こんなに小さくなっちゃったんだけど。」

そう言つて、佳奈が俺にあるものを見せてくる。

「ん．．．．．？」

振り返つて佳奈のほうを見てみると。

「なんだこれ？にんにくか？」

そこには小さな三角っぽい形をした黄緑色の何かが転がっていた。

「いや、にんにくなんて俺買つてねえし．．．．．なんだこれ？」

「兄貴でも分かんないの？だったらこの野菜、不良品だったんじゃないの？」

「うゝん不良品ねえ．．．．。」

確かに何枚もの皮？を剥いて、現れた姿がこんなにんにくもどきだったのなら、不良品だったのかもしれない．．．．。でもそんな何枚も皮を剥く野菜なんて俺買ったっけ？

「ちなみに元はどんな形をしてたんだ？」

「なんか下のほうがこう丸みを帯びてて、どんぐりみたいな形してた。」

「どんぐり？」

「で、なんか上のほうがふさふさしてた。」

「ふさふさって．．．．。」

おい．．．．それってまさか．．．．。

「もしかしてそれ、上のほうが緑色だった？」

「うん。」

「それどう考えても白菜ですよね！？剥いても剥いても剥くんじゃないよー！！」

そして、この目の前に転がってる物体は確実に白菜の芯の部分ですよね！？

「へー．．．．。白菜って食べるとこあんなに少ないんだ。始めはあんなにおっきかったのに、剥き損だわ。」

「違う！もう何もかもが違う！！そして芯の部分はあんまり食べない！！」

こいつ、本当に料理はダメだな！そして佳奈の陰に隠れて見えなかったけど、奥にあるあの山盛りになってる緑色の物体はどうみても白菜の葉だよな！？

「えっ？じゃあ白菜の食べる部分はいつどこへ行ってしまったのよ？」

「たった今、お前が箸り取っていったんだよ！！」

「もー！！うっさいわね！！あんたが剥けって言ったから剥いたのよ！！」

逆切れされてしまった。

「あー．．．．。分かった、分かった。俺の言い方が悪かった。あとのやつは全部これで剥いてくれ。これなら失敗はないから。」

そう言っつて、佳奈にピーラーを渡す。始めからこうしておけばよかった．．．．。

「何よこれ？」

「使ったことないか？こうするんだよ。」

そう言っつて俺は人参の皮を剥いてみせる。

「何よ、簡単に剥ける道具があるんじゃない。始めから貸しなさいよ。」

「あー、はいはい。早く全部剥いてくれ。」

そう言って作業に戻る。

早くしないと千夏達に怒られるぞ。白菜は味噌汁にでも入れよう．．．

．．．十分後。

「よし、こんなもんな。」

「ん．．．。あら？難しいわね．．．これ。」

下ごしらえを終えると、また佳奈が呟きだした。今度はなんだ？

「おいおい、ピーラー使って皮剥きが難しいなんてありえなああああああああー！」

「何よ。うつさいわね。」

「どうしてそうなった！！」

なんと佳奈はピーラーで梅干の皮を剥いていた。正気の沙汰とは思えない……………。

「そしてこれを……………」

全てを剥き終った佳奈はおもむろにその梅干を……………。

「待て！、一体何をする気だ……………！？」

味噌汁の中に突っ込んだ。

「うわあああああああああああああ。」

涙が止まらなかった。

~~~~~・~~~~~・~~~~~・~~~~~・~~~~~・

「すっぱー！なんだ！？今日の味噌汁、白菜だらけの上にやけにすっぱいぞ！？どうなってるんだ！？」

「気にするな．．．．．。ちよつとした．．．．．そう．．．．．
．．．ちよつとした．．．．．。大失敗だ。」

「どつちなんだ！？兄ちゃん！？」

今度から佳奈は料理のサイクルから外そう．．．．．。

そう思つて何気なく横を見ると．．．。

「むむむ．．．．．。」

愛菜が味噌汁とにらめっこしていた。

「どうしたんだ？無理して食べなくていいぞ。それは人間の食べ物じゃないからな。」

「ふん！どうせ私は料理が下手ですよ！」

いやいや、下手とか言う次元をはるかに凌駕してリミットブレイクしてますよ？佳奈さん。

「ううん……。佳奈お姉ちゃんが私達のために一生懸命作ってくれた料理を残すなんてできないよ。」

「愛菜……………」

うわああ、なんて思いやりのある子に育ってくれたんだ……………。
……。兄ちゃん嬉しいぞ。

「そうですよ、どんなものでも残すことは良くないことですから。」

そう言いながら、愛菜の方を向いている千夏の空になった味噌汁の容器へ自分の味噌汁を移し変える雅。お前、最悪だな。

「雅姉ちゃん、いいこと言うじゃねーか。ズズズ。すっぱー！」

そしてまるで何事も無かったかのように味噌汁を飲む千夏。こいつは本当にバカだなあ。

「わ、私も！い、いただきます！！ズズッ！」

意を決したかのように勢いよく味噌汁を飲む愛菜。ほ、本当に大丈夫か！？

「ふう．．．．．。」

あれ？以外となんともない？どうやら無事．．．

「参りました。」

「じゃない！！すっかり錯乱してる！！味噌汁飲んで『参りました』は明らかにおかしい！！」

だから無理するなと言ったのに！！

「．．．．．おいしい。」

「へっ？？」

今、ありえない言葉を聞いたような気がする。気のせいかな？

「……………この味噌汁……………おいしいよ？」

「お、お世辞なんていらないわよ！！」

「……………お世辞じゃない……………本当に……………おいしい。」

「優希……………」

「……………ちゃんと、お兄と……………佳奈の優しい味……………するよ？」

「あ、当たり前じゃない！！私が心を込めて作ったんだから、マズイわけがないじゃない！！！」

「……………うん。」

「あ……………ありがとう／＼／」

「……………うん。」

佳奈の料理のサイクルへの復帰……………確定だな。

「さーと、じゃあ片付けて、俺は真夜中テ。ビでも見るかな!!」

「えっ!?! 兄ちゃん、そんな夜中中起きてて、明日起きれるのか?」

「明日? 明日とか何かあったっけ?」

「何言ってるんだよ、明日から新学期。学校の始まりじゃん。」

「……………マジで?」

もうそんな時期でしたか……………。

第五話 登校日

今日は4月8日。今日から新学期が始まるんだが・・・。

「なー！兄ちゃん！私の体操服ってどこだー！？」

「だから、昨日言っただろ！お前の部屋の箆笥の上から2番目の左側だ！」

「か、佳奈お姉ちゃん！は、早くしないと遅刻しちゃうよ！」

「わかってる！もー！なんでこんなに髪がまとまんないのよー！！」

「優希！あなたなんで兄さんのTシャツ着て寝てたんですか！？そこんところ詳しく！」

「・・・・・・・・・・？」

俺達はずいぶん朝から焦っていた。

「なんで、全員昨日のうちから準備してなかったんだ！？」

「『『『兄さんに言われたくない!!』』』」

ぐぬぬ．．．！確かに俺は今日が入学式だということすら知らなかったが．．．．．。そんなことは今はどうでもいい！

「とりあえず、早く全員準備しろ！その間に俺は朝飯を作っておくから！」

残された時間はあと二十分ぐらいか．．．。ギリギリだな。

「兄貴、私の助けが必要なんじゃないの!？」

「気持ちだけ受け取っておこう!!」

「どっという意味よ!？」

「察しろ!!」

悪いが、今佳奈に手伝われたら何もかもが終わる!!

「兄ちゃん！体操服あったぜ！！」

「そうか！それはよかった！」

「どうだ！似合ってるか！？」

「最高だぜ！ってなんで体操服着てんだよ！？制服はどうした！？」

「しまった！見つけた時ついテンションが上がって着ちまったぜ．．．」

「お前は本当にバカだな！！いいから早く着替えてこい！！」

そうして時間は過ぎていく．．．。間に合うのか．．．？

くくく．．．くくく．．．くくく．．．くくく．

「はあ．．．はあ．．．。」

「ここまで来れば、間に合うだろう．．．。」

「まさか、入学式の日から走ることになるとは思いませんでした・
・。」

俺もだ・・・。でもまあ、走ったおかげで遅刻することはなさそうだ。よかった・・・。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

背中におんぶした愛菜が心配そうな声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。もう下ろすぞ？」

「うん、ありがとう。お兄ちゃん！」

ここまで走ってくるのに流石に小学5年生になる愛菜をいっしょに走らせるわけにはいかない。ってことで俺がおんぶしながら走ることになったわけだが・・・。

いくら愛菜が軽いからといってもそれなりの距離をおんぶしながら走るのは流石につらい・・・。汗だくだ。

「・・・・・・・・お兄、お水。」

そう言って、優希がペットボトルを差し出してくる。

「ああ。ありがとうな。」

「・・・・・・・・ん。」

それにしても優希は汗一つかいてない。運動得意なのか・・・・？。

「じゃんけん、ほい！はい、また私の勝ちね。千夏お姉ちゃんほら、がんばって！！」

「ちくしょー！！これで8連敗だー！」

後ろでは佳奈と千夏が荷物持ちをかけて盛大なバトルを繰り広げていた。つつか元気だな・・・・お前ら。

「それにしても、雅達の学校が全員夢ノ宮だったのは驚いたな。」

「そういえば、言ってませんでしたね。」

夢ノ宮学園。それが俺達に通っている学校だ。家から2キロ程離れたところにあり、超がつくマンモス校で、小学校から高校まで全てが広大な敷地の中に纏まって存在する。大学だけが離れた場所にある、いわゆる付属の学園なわけだが……。

「これも、母さんの計らいか？」

「はい。兄妹全員が同じ学校なら、心配も少なくてすむと言っていました。」

「なるほど。」

母さん、ああ見えて結構心配してくれてんだな……。今度何か送ってやろうか……。

「そして、『ぶっちゃけ決めるの面倒だし』とも言っていました。」

「明らかにそっちが本音だな。」

腐った卵でも送ってやろう……。

「あの．．．。兄さん、夢ノ宮ってどんな学校ですか？」

「ん？．．．そうだな。一言で言うとかかなり自由だな。大体のことは許される学校だよ。茶髪のやつもいるし、そんな厳しい校則も無いしな。」

「自由ですか．．．．．。」

「ああ、あとは生徒のほとんどが変人だらけってことかな。いや、生徒だけじゃなく先生もかな。とにかく変わった学校だけど、いいところだぜ。」

「変人って．．．．．兄さんよりもですか？」

「それはどういう意味かな？」

「なんで俺が基準なんだよ。」

「いや、兄さんみたいな人がそんなにいるなんて一般人の私に耐えられるか心配で．．．。」

「お前、兄ちゃんのこと嫌いなのか？ そうなのか？」

俺何かしたっけ．．．？

「でも．．．安心しました。」

「ん？」

「いえ、兄さんがそう言うのなら佳奈や優希たちも安心して学校に行けるでしょうから。」

後ろを向くと、愛菜と優希、千夏と佳奈がそれぞれ楽しそうに会話をしている姿が見えた。

「どういう意味だ？」

「別に深い意味は無いんですが．．．。ほら、私は高校入学という形ですが、佳奈や優希は編入という形になるじゃないですか。そこが少し心配だったんです。」

なるほどな．．．。学生にとって、転向というものは思いのほか

緊張するものだ。それが編入ともなると、なおさらだ。だけど．．．。

「大丈夫だろ。佳奈も優希も強い子だろ？」

「そうですね．．．。」

「それに、中等部には千夏もいるからな。あいつああ見えて人気あるんだぜ？いざとなったらきつと妹達を守ってくれるさ。」

「そうですよね！」

そう言って後ろの妹達を見渡すと．．．。

「うわー！！これで18連敗だー！！私はもうだめだー！！」

千夏が叫んでいた。

ちょっと心配になった．．．。

第六話 悪友

「兄さん、私は少し準備があるので先に行きますね。」

校門が見えた辺りで突然、雅がそんなことを言い出した。

「ああ。また後でな。」

「はい。」

そう言って、走って校門のほうへ向かっていく。

「お兄ちゃん、私も行ってくるね。」

「おう、気をつけてな。」

そう言って、愛菜は校門のレンガ沿いに左方向へ歩いていった。

この学校は敷地がとても広いので、校門が何個も存在し、それぞれ高等部、中等部、初等部に隣接した門がある。別にどこからでも行けることは行けるのだが、大体はそれぞれに近いところを通る。

「兄ちゃん、私達も言ってくるぜ！」

ここで千夏達とも別れる。

「ああちゃんと佳奈と優希を案内してやれよ。」

「まかせとけて！」

「佳奈も優希もまあがんばれよ。」

「言われなくても大丈夫よ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん。」

そう言っで、3人そろって走っていった。

「やれやれ・・・・・・・・ん？」

佳奈たちを見送っていると、千夏の鞆から何か白いものが落ちた。

「おい！千夏．．．って行っちゃった。」

あいつ、鞆のチャック開けたまんまなの気付かなかったのか？ったく。

仕方なく、落ちたものを拾い上げる。なんだこれ？ハンカチか？

ぺろん。

「って！これパンツじゃねーか！！なんで鞆に入ってたんだよ！？」

これどーすりゃいいんだよ．．．。

「まあ．．．帰ってから渡すしかないか。」

そう思い、鞆の中にしまう。なんか落ちつかない．．．。

「お？和じゃねーか？久しぶり。」

そうこうしていると後ろから声をかけられた。この声は……。

「おう。良か。」

稲葉 良。身長は俺と同じぐらいの170ちょい。この学園でも一二を争う変態だ。俺の数少ない悪友。説明終わり。

「お前、春休み何やってたんだよ？全然連絡つかねーし。」

「ああ……。ちょっといろいろあつてな。それよりもお前は何してたんだよ？」

「うん？俺か？いや……ちょっと空を飛んでみたくて毎日座禅組んで気を溜めてた。」

相変わらず、スケールのでかい男だ。

「で、結果は？」

「ああ、10cmしか浮かなかった。つまらん。」

「えっ！？何？浮いたの！？マジで！？」

なにもんだこいつ！？

「そんなことよりお前に聞きたいことがある！あのカワイ子ちゃん
3人組は誰だ？」

「空飛んだのに興味は女子か．．．。3人組？なんだそれ？」

「しらばつくれるとはいいい度胸だな！お前と千夏ちゃんと愛菜ちゃん
の隣にいた3人の美人だよ！」

あー。雅達のことか．．．どうするかな。本当のことを言っベ
きか．．．。

しかし、軽く『妹が5人に増えた』なんて言ったら女に飢えてるこ
いつは何をしでかすかわからない。ここは一つ試してみるか．．．。

「3人とも俺の彼女だと言ったら？」

「お前を殴り殺す。」

「3人とも俺の妹だと言ったら？」

「お前を刺し殺す。」

「3人ともそこでたまたま知り合った、何の関係もない女子と言ったら？」

「お前を蹴り殺す。」

「なんでだよ!？」

全部、俺が死んでるじゃねーか!？

「うるせえ! なんでお前みたいなブサイクにそんなに女の子が寄ってくるんだよ! 納得いかねえ! なんで俺の隣には女の子がいないんだ!？ 毎日お祈りしてるのに!？」

「う、浮いてる!？ あまりの怒りに体が浮いてるぞ!？ と、とりあえず落ち着け!」

こいつ、本当に浮きやがった……。あの話は本当だったのか!?

「で、結局どういう関係なんだよ!？」

「仕方ねーなあ……。。」

- - - - -

「というわけだ。分かったか？」

俺は雅たちのことを超簡潔に説明した。

「ということだ。和にはもともと千夏ちゃんと、愛菜ちゃんという超可愛い妹が二人いて、そこに新しく超可愛い妹が三人加わった。お前はそう言うのか？」

「理解が早くて助かる。」

「死ね!」

「うおわぁ!危ねえ!」

こいつ！つまようじで腹を刺しにきやがった！なんて微妙な攻撃だ．．．。

「お前みたいなゲス野郎には俺が春休みに編み出した『真・つまようじ殺法』で冥土送りにしてくれるわ！」

「お前．．．本当に春休み暇だったんだなあ．．．。」

ちよつと涙が出た．．．。今度遊んでやろう．．．。

「はっ！待てよ．．．！？」

「今度は何だ？」

「俺とお前は親友だよな？」

「は？．．．いきなりなんだ？．．．まあ友達ではあるか？」

空を飛ぶ友人．．．。不気味すぎる。

「

「なんだ？」

「おい、どうした和？」

あつ、正気に戻ったのか。よかった。

「いや、何か列ができてんだよ、並ばないと入れなさそうだ。」

「列？ほんとだ。ちょっと見てみるわ。」

そういつて10cmほど浮いて辺りを見渡す良。便利だなその能力。

「ああ。あれは持ち物検査だな。」

「持ち物検査？」

「去年もやったじゃねえか。入学式の日に最初だけ。」

「ああ、そういえば……。」

やったような、やってないような……。

「でも、なんで最初だけやるんだ？意味あんのか？」

「そりゃあるだろ。最初にやっとけば、次いつあるかわからんから下手に物を持ってこれなくなるだろ？牽制と抑制という二重の効果があるんだよ。特に何も知らない1年生には効果抜群だろ。」

「誰だお前！？」

「良だよ！？いきなり何言ってるんだ！？」

こんな真面目なことを言う友人を俺は知らない。

「ちょっと！早く鞆出してよ。瀬川！」

良と話していると急に声をかけられた。どうやらいつのまにか、持ち物検査の順番が回ってきていたようだ。

「おっと、悪い。ってあれ？」

「何よ？」

「いや、俺ら初対面だよな？何で名前知ってんの？」

目の前にはふわふわの髪で、眼鏡をかけて、気の強そうなつり目をした女の子が立っていた。腕には風紀委員と書かれた腕章が巻かれている。もしかして俺の隠れファン？

「知ってるに決まってるでしょ。瀬川和樹、稲葉良、あなた達二人はこの学園の有名人なんだから。」

「えっ？俺も？」

後ろの良が反応する。こんなときだけ働く非常に都合のいい耳だ。授業は全く聞かないくせに……。

「えっ？何？俺達そんなに有名人なの？やだなあ、やっぱりこの溢れ出るカリスマは抑えきれてなかったか。仕方ないな。後ろの女の子達にサインをあげてこよう！！」

良は体中をくねくねさせながら、後ろの女の子達に近づいていった。

気持ち悪すぎる。見なかったことにしよう。

「でも、知らなかったな。俺達がそんなに人気あったなんて……」

これが噂のモテ期ってやつですか！？ついに俺にも春が！？

「は？何言ってるのあなた達？私は確かに有名人とは言っただけ、人気があるとは一言も言っていまいわよ？」

「は？」

えっ？どういうこと？ちょっとお兄さん意味がわからない。

「そりゃそうよ。なんたってあんた達が有名な理由は、去年、全学期全科目で補修を受けたという、今まで誰も成し遂げなかった快拳をやったのけたことだからね。」

「それは、つまり……。」

嫌な予感がプンプンしやがる。

「そ。悪評つてわけよ。ちなみについたあだ名が『補修キラー』、知らなかった？」

「知りたくなかった！そんな情報は知りたくなかった！」

なんて不名誉なあだ名だ！！ちなみに後ろのほうでは、バチーン！バチーン！と誰かの頬を思い切り叩いたような子気味良い音が鳴り響いていた。

第六話 悪友（後書き）

ついに新キャラが出てきました！！

しかし、書きたいことが多すぎて物語が全然進みません！ごめんなさい！

そしてキャラが早くも一人歩きし始めてしまいました。特に雅は一体どうなってしまったんだろうか……。構想ではしっかり者のはずだったのに！

遅くなりましたが、こんな小説かどうかよく分からないものに目を通して頂きありがとうございます！皆さんのおかげでこの小説、1週間で5000近いアクセスをいただきました！本当にありがとうございます！

さて、学園もついに始まり、新しいキャラもこれからどんどん出ていく予定です。

何かこうしてほしい、ここが見にくい等ありましたら、コメントお願いします。

意見、感想等ありましたら、気軽に書きこんで下さい。

それではまた次回。楽しんでいただけたら幸いです。

春夏秋冬

第七話 持ち物検査

「俺は何も言っていないのに、近づいただけ頬をメチャクチャ叩かれた……。あまりに一瞬の出来事で何がなんだか俺にはさっぱり……。」

両頬を2倍程に膨らませて、良は俺の後ろに戻ってきた。

「そうか、それは災難だったな……。」

でも、近づかれた女の子のほうがよっぽど怖かっただろうな……。可哀想に……。トラウマにならないといいなあ。

「これで分かった？あんな達の評判がいかにも悪いかが。」

「ああ、かなりの予想外だ。」

「ま、あんなたち二人とは長い付き合いになりそうだし。私は今年から風紀委員長をやらせてもらう千葉香苗よ。よろしくね。」

「「謹んで、遠慮させていただきます。」」

「なんでよ!？」

誰が好き好んで風紀委員なんかと仲良くなるか!自分から首を絞めに行くなんてドMか!

「ったく、まあいいわ。とりあえず鞆を出して。後ろがつつかえてるから。」

「ああ。」

半分はお前のせいだけだな、と思ったけどもちろん口には出さない。

「ほらよ、さつさと見て、通してくれ。」

そう言つて、鞆を差し出す。今日は特になにも入れてないから大丈夫なはずだ。

「ノートに、筆箱、プリント……あら、何か意外と普通ね?」

「意外とつてなんだ、意外とつて。」

「いや、てつきり、いやらしい本とか入ってるのかと思ったけど。」

「俺は中学生か!？」

そんなもの、学校で見るか!そういうものは、家でじっくり見るもんだ!学校なんかを持ってきたら動揺して落ち着いて見れねえだろ!?

「なあ!良?」

そう言つて後ろの悪友の方を向く。

「え?あ?な?何もないよ?」

すげえ動揺していた。

「お前、まさか・・・?」

「な、何言つてんだよ和!去年、俺が学校にそんなもん持ってきたことが一度でもあったか!？」

「ちなみに、去年一年間で稲葉が没収されたいやらしい本は合計で365冊よ。」

「毎日じゃねえか！少しは懲りろ！」

しかもよく考えたら休みもあるから、ほとんど一日二冊じゃねえか！
！とんでもねえ奴だな！

「つーか、早くしてくれ。遅刻する。」

「誰のせいよ。誰の。まあいいわ、とりあえず変なものは入ってな
――――」

「なんだよ、どうした？いきなり止まって。」

鞆を整理していた千葉の動きが急に止まった。なんだ？トイレか？

「すみません、先生。お願いがあるんですけど……。」

千葉は鞆から顔を上げると、傍らに座っていた監視の先生に声をかけた。

「そうか！俺のあまりに素晴らしい鞆の中身に、おもわず俺が問題児ではないということを先生に証明したくなっただな！よし、千葉とやら！思っ存分言ってやれ！」

「警察を大至急呼んでください！」

「うんうん！警察を呼ぶほど優秀な俺は……………って警察！？」

え！？ナニナニ！？どういうこと！？一体どういうことですか！？
千葉さん！？

「おい！いきなりなんてことを言いやがるんだ！お前は！」

「あんた、自分が何したか分かって言ってるの？」

「は？何言っただお前？」

全くワケが分からない……………。何がどうなってるんだ？

「はあ．．．。自分で盗ってきといてしらはつくれるとは見下げた男ね。いいわ、見せてあげる。あんた．．．これは一体何!？」

そう言つて、俺に見せてきたものは．．．．．真つ白なパンツだった。パンツ?．．．パンツ。はっ!!

「しまったあ!!」

「しまった!？今あんた、しまったつて言つた!？ほら見なさい!さあ白状してもらうわよ!これは一体どこで盗つて来たパンツなの!？正直に吐きなさい!!」

「いや!これは違う!これは別に盗んだとかそういうものじゃない!!」

くそっ!千夏が落としていったパンツのことをすっかり忘れていた!まさかこんなところで見つかるとは．．．!!

「じゃあ!一体なんだつて言つのよ!」

どうする?ここで下手に嘘をついても後々困ることになる．．．。ここは正直に言っしかねえか。

「違うんだ。聞いてくれ千葉。お前は誤解している．．．。」

「何を誤解してるって言うの．．．？」

「これは．．．．．妹のなんだ。」

「．．．．．。」

な、納得してくれたか？

「先生、刑務所の空を確認してもらえますか？」

「刑務所！？おのれ！お前は警察に捜査すらさせないで、俺を直接刑務所にぶち込むつもりか！？」

血も涙もない女だな！！

「あんた、まさか他人のだけでは飽き足らず、まさか家族のパンツまで盗むなんて．．．。しかもそれを堂々と持ち物検査に出すなんて．．．。噂以上の変態ね。」

「お前に言いたいことは髪の毛の数ほどあるが、とりあえず誤解だと再度言わせてもらおう!!」

くっそっ！一体どうしたらいいんだ！このままじゃ、生活指導室を飛び越えて刑務所行きは確定だ！それはいくらなんでも飛び越えすぎだろ!!

「ちょっと待ってもらおうか……。」

一体どうしたもんかと頭を抱えていたら、良がいきなりでしゃばってきた。何を言う気だこいつ？

「千葉、お前は和のことをよく知らずに、憶測で話を進めすぎている。」

「うぐっ……。」

千葉が小さくうめく。ま、まさか良が俺を庇ってくれるなんて！今日ほどお前の親友でよかったと思ったことはない！

「良……。」

「まかせろ。」

良が俺にだけ聞こえるように、小さく呟く。ああ．．．今お前は最高に輝いているよ。後は全てお前に任せよう！

「千葉、お前は疑問には思わないのか？」

「な、何をよ!？」

「普通、人の下着等を盗んで鞆に入れたことを忘れると思うか？」

「うっ！それは確かに．．．。」

「そして、それを堂々と持ち物検査に出すやつがいると本当にお前は思うのか？」

「うっ．．．。」

あ、あの千葉が何も言えないなんて！すげえ．．．すげえよ良！

「で、でも、瀬川は実際妹のだって言ってたわ！」

「それは、こいつも気が動転していたんだろうよ。思わず妹のなんて嘘をついてしまったんだ。そうだろ和？」

「もちろんだ！」

もちろん嘘だけだね。

「じゃあ！他人のでもなく、家族のでもないとしたら、一体これは誰のなのよ！？」

確かに千葉の疑問は最もだ。実際妹のなんだしその可能性を自ら消した今、良のやつ、どうやって解決する気だ……？

「分からないか？至極簡単なことじゃないか。他人のでもない、家族でもない。そうなるとこの下着の本当の持ち主はズバリ……」

「ズバリ？」

「瀬川和樹本人のだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

思わず、千葉とハモッてしまった。ちょっと待って混乱してます。
ハイ。

「えっ？何？ちょっと待って！え？つまりこういうこと？その下着は瀬川本人ので、いつもそういうのを穿いてるってこと？」

「その通りだ。」

「その通りじゃフガフゴフガ！」

反論を言いかけた俺は良に口を押さえつけられた。何しやがる！！

「落ち着け、和。今はこうするしか方法はないんだ！」

良が耳元で囁いてくる。

「アホかお前は！いつもこんなん穿いてるって周りに知られたら、俺はこれからこの学園でどうやって過ごしていけばいいんだよ！？」

「じゃあ、大人しくお縄につくか？」

「ぐっ．．．！」

くそお！史上最悪の二択だ！

「あ、あの．．．瀬川、今の話．．．本当なの？」

「．．．．．ハイ。」

終わった。俺の学園生活はここで幕を閉じた。

「そうなんだ．．．。あつ！ゴメンね？疑っちゃって．．．。
瀬川がそんな趣味持つてるなんて知らなくて．．．。」

「ふぐうう．．．．．。」

涙が！止まらない．．．！

．．．．．っていうか、良のやつドサクサに紛れて持ち物検査スルーしてるし！ムカつくー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9706y/>

Sister Panic！！

2011年12月5日22時50分発行